

No.92 ゴンサロ・フォンセカ

「ベマ」

Gonzalo Fonseca

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 9 月 1 日付 立川市市報記事より

フォンセカは、ウルグアイ出身だが、ニューヨークにアトリエがあり、仕事はイタリアでやっている石彫の大家である。

作品のタイトルは、「ベマ」で、^{みちしるべ}道標を意味する古い言葉だそうだ。石というのはギリシャやローマ時代では一種の灯台、明りの役目をしていたというが、道々に置かれた石は、道標として人々の旅路を照らしだし、導いた。車止めとして置かれたこの作品もまた、照明灯のようなものなのだ、と彼はいう。フォンセカにとって、光とは古代から時を経て宿り続ける内なる生命の灯のようなもので、彼は石の中に光を見ているのだ。この石の作品がやわらかな感じがするのは、私たちもまたそうした石の光を見ているからなのだろう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

私はBEMA(ベマ)が、一種の庭の照明灯のようなものとして受け入れていただければと願っています。

石に装いを施すという考えは古代—CIPPUS (*訳注;古代ローマ帝国の標石)、PIETRA MILIARIA (*里程)、KUDURRO、HAUT LIEU (*高地標) などがあり—、BEMA もまた古い言葉です。